

琉球大学学術リポジトリ

令和3年度プロフェッサー・オブ・ザ・イヤーを受賞してー「日本語研究入門」ー

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学大学グローバル教育支援機構 公開日: 2023-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉村, 裕美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002019748

令和3年度プロフェッサー・オブ・ザ・イヤーを受賞して — 「日本語研究入門」 —

吉村 裕美
人文社会学部

1 はじめに

令和元年度に続き、「日本語研究入門」でプロフェッサー・オブ・ザ・イヤーに選出されたことは、驚きでもあり、また喜びでもあった。

令和元年度は、対面で、今回の令和3年度は、コロナ禍で、完全オンライン双方向で実施した授業が対象であった。オンライン授業という制約がある状態の中で、いっしょに授業を創り上げてくれた学生たちに心からお礼を申し上げたい。

この文章では、当該授業において、どのような工夫をおこなったかを、できるだけ客観的に記録しておきたい。もっと効率のよい方法もあるはずだが、素人なりの工夫が、何らかの参考になれば幸いである。

2 授業の概要

「日本語研究入門」は共通教育の人文系授業の一つであり、定員は50名。時間割の関係で毎年医学部の学生の履修が毎年多いのが特徴である。

バズセッションやグループワークを取り入れたアクティブラーニング系の授業である。この授業では、毎日のコミュニケーションで何気なく使用している「日本語の表現」の特徴について、気づき、分析し、考えていく。文字・語種・命名・オノマトペ・位相語・比喩表現などをテーマとして扱う。共通教育という特性を考え、体系性よりトピック性を重視している。

達成目標は以下の3つである。

- (1) 授業中のグループ活動に積極的に参加し、意見交換を行うことができる。[社会性]
- (2) 日本語の表現のさまざまな特徴について、問題意識を持ち、資料を集め、分析することができる。[自律性][問題解決力]
- (3) 日本語の表現のさまざまな特徴について、分析した結果をわかりやすく他者に伝えることができる。[コミュニケーション・スキル]

授業は、コロナ禍で、Teamsを用いた双方向授業の形式を取った。また、課題提出は、webclassを併用した。さらにSlidoも併用した。複数の組み合わせを選んだ理由については、後述する。

評価の方法は以下のとおりである・

- (1) 中間レポート (20点)
- (2) 期末レポート (20点)
- (3) 毎回の課題 (40点)

(4) リフレクション・活動状況 (20点)

評価は観点別の加点法を採用し、学修過程を重視している。

3 授業の工夫

3.1 Teamsの利用

オンライン双方向の授業を実施するにあたり、zoomではなくTeamsを使用した。資料の共有や、過去の活動の参照などが用意であり、チャットの活用も便利であるため、こちらを選択した。2020年度、コロナ禍に突入してすぐは、使い勝手が悪いところも多々あったが、徐々に改善され（画面表示人数や、ブレイクアウトルームの実装など）、2021年度当該授業を実施するときには、使いやすくなっていた。

授業の前半は、学生はカメラ・マイクオフ、教員はカメラ・マイクオンで、今日扱う内容を簡単に解説し、後半のグループワークの課題を提示する。教員の話が一方向的にならないように、随時間いかけを出し、その反応にはSlidoを併用した（後で触れる）。

授業の後半は、ブレイクアウトルームを設置し、グループワークとなる。ここでは学生は基本的にカメラオン、マイクオンで参加する。どうしても無理な場合は、カメラオフや、チャットによるディスカッション参加も認めた。毎回グループメンバーは変更した（Teamsのブレイクアウトルームの自動作成）。グループ活動中は、教員は各部屋を訪問して、ディスカッションが進んでいることを確認したり、ヒントを出して回った。履修者数が多いため、毎回9グループ程度の設定となり、参与観察する時間が短くなったのは残念だった。グループ活動では、司会と記録を最初に決めてもらい、メモを残してもらった。大きなトラブルはなかったが、小さなクレームは個人チャットで届くことがあった。クレームに対しては、厳罰的ではなく、クレームを寄せてくれた学生に寄り添う方向で対応した。

授業の後は、Teamsの投稿欄に簡単な振り返りを記入してもらった。この振り返りの時間は、基本的に授業時間内に（5～10分）設けて、宿題にはならないようにした。

3.2 Slidoの利用

Slidoは、会議や授業などで、参加者と双方向でQ&Aや、ライブ投票、アンケートなどを行うことができる質疑応答サービスで、匿名でもハンドルネームでも参加できる。遠隔授業では、学生の顔が見えず、反応を知ることが難しい。また、学生も、他の参加者の存在を感じることに難しいため、孤独感を抱えがちである。（Teamsのチャット機能を用いて、質問を受け付けたり、意見を聞くことももちろん可能なのだが、氏名が表示されるため、投稿をためらう学生もある。）実際に使用してみると、授業時間内で、さまざまな反応が返ってきて、教えている方もやりやすかったし、学生の評価も高かった。

また、途中でふと思いついて、授業前雑談を始めた。オンライン授業では、授業の10分前くらいから、Teamsの会議を立ち上げて待っていると、徐々に学生が入室してくるが、開始時間まで、どちらもカメラもマイクもオフでじーっと待っていることになる。対面の講義であれば、その時間帯に雑談をすることもあるのに、と残念に思っていたが、Slisoで雑談ができることに気づいた。季節の話題や、ニュースなどをお題として投稿すると、学生たちがさまざまな反応

をしてくれた。中には、自分から話題をふってくれる学生もあった。このやりとりが、ウォーミングアップのような効果も生み、授業中も活発な投稿があった。

難点は、双方向授業ではSlidoを併用すると、いろいろな画面を同時に確認する必要があることだった。この授業では最終的に3画面を使い分けて授業を実施していた。ちょっとしたトレーダーのような状態だった。

少し話題が逸れるが、Slidoは授業だけでなく、年次別懇談会やオープンキャンパスでも欠かせないツールになりつつある。学生たちは、時に、リアルなコミュニケーションよりも、文字でのコミュニケーションのほうが饒舌である。

3.3 webclassの利用

課題の提出、チェックは、webclassで行った。Teamsでも課題管理は可能であり、2020年度後期はTeamsで双方向授業だけでなく課題の管理も行っていたが、いくつか不便を感じたため、2021年度前期（この授業の開講期）は、課題については、以前より使用していたwebclassに戻した（資料の共有などはTeamsで行っている）。

課題には、毎回の予習または復習課題と、中間・期末の大きな2つの課題がある。毎回の課題は、提出後、他の受講生が自由に見ることができる。学生たちは、手抜きで作成したレポートを友達に見られるのは恥ずかしいようで、公開されることが、課題に積極的に取り組むモチベーションとなったらしい。

また、中間と期末の大きなレポートでは、相互評価（ピアレビュー）も行った。ピアレビューにあたっては、評価の観点を複数示し、だいたい平均点がこれくらいになるように、という指示も出し、コメントも必須とした。

ピアレビューでは思った以上にしっかりと評価が行われ、鋭い指摘もあった。また、レポートの書き方について、いろいろな見本（良い見本、悪い見本）を見ることができたのも好評だった。さらに、教員の方も、学生の指摘が勉強になるところもあった。

対面のときは、紙で同様の活動（相互評価）を行っていたのだが、これがwebclass内で可能であることに気づいていなかった。オンライン授業でいろいろな機能を探しに行ったことが、幸いした例である。

4 令和4年度の改革

ここまで、令和3年度の「日本語研究入門」でどのように授業を運営してきたかを記してきたが、実は、この授業は令和4年度から、やり方を大きく変えている。

簡単にどのように変更したかを記しておく。

まず、対面授業に戻った。

そして、新たに教科書を使用するようになり、完全な反転型授業に変更した。

対面には戻ったが、オンライン授業で工夫したことを次のような形で継承した。

- ① Teamsを利用し、資料の共有を行う（紙での資料配付はない）
- ② グループごとのチャンネルを用意し、グループ活動で自由に使えるようにする
- ③ 授業運営についての意識調査やアンケートなどにはSlidoも利用する

④ 課題管理はwebclassで行い、ピアレビューも継続する

これまで、部分的な反転型授業は何度も行ってきたが、全面的な形での運用は初めてだった。チャレンジではあったが、学生たちの協力もあり、概ね順調に運営できた。数人のドロップアウトがあり、慣れない授業形態に戸惑った学生もあったように思われるのが、反省点である。

5 おわりに

個人的に、授業の運営方法を工夫することには抵抗がない。

難しい内容を難しく教えるのは簡単だが、学問の最先端をどうすれば学習者の咀嚼できる形で提供できるかを常に考え、工夫していきたい。

特に、共通教育では、「単位の数を揃えるために、空いている時間に登録しただけ」の学生たちに、「履修してよかった」と思ってもらえるように今後とも努力を重ねたい。

「最近の学生たちは」と学生を責めるのは簡単だが、教えるためのツールも、学生の質も、そして大学教育に求められるものも、かなりのスピードで変化している。すでにアラ還と言われる年齢ではあるが、なんとかそのスピードについていきたいと希望している。